

ゼミ合宿で彫刻の森美術館を訪れて ——大自然が包み込む造形美と、野口哲哉の世界

国際日本学部 日本文化学科3年 久保田 瑞生

四季折々の美しい風景や魅力があふれ、歴史が息づく箱根、都心からの交通アクセスも便利で、老若男女問わず楽しめる魅力的な観光地である。国際日本学部日本文化学科松本ゼミナールでは、箱根に点在するいくつかの美術館へ足を運び、自然と文化が融合した、箱根の多彩な魅力に触れてきた。本稿でまとめるのは、そのうちの「彫刻の森美術館」についてである。

彫刻の森美術館は一九六九年に国内で初めて創設された野外美術館であり、近現代を代表する国内外の巨匠の作品一二〇点余りが展示されている。併設されるピカソ館では、約三〇〇点のコレクションが順次公開されている。自然と芸術の調和をめざした美術館ということで、広大な敷地の中を散策気分で見賞できる、とても開放的な空間であった。また、今回は立ち寄ることはできなかったが、敷地内から湧き出る源泉を活用した足湯もあり、次回訪れる時にはぜひ利用してみたい。

当日の流れは、入館後エスカレーターを降り広場に出たところで、各自自由に散策をはじめ鑑賞するというものであった。展示されている彫刻には、題名と作者が書かれているだけであり、詳細



彫刻の森美術館《星の庭》

な解説に頼るのではなく、各々が鑑賞して思ったことや感じ取ったことを自由に発言したり、実際に自分たちで彫刻と同じポーズをとってみたりと、全身を使い作品との対話を行った。

特に印象深かったのは、ゼミ合宿での来訪時に開催されていた「野口哲哉 鎧を着て見る夢 — ARMOURED DREAMER —」という企画展示である。野口哲哉は「鎧と人間」をテーマに、文明社会や人間への好奇心を追求する現代美術作家である。彼の作品を見るのは初めてであったが、樹脂やアクリル絵の具を駆使したその質感表現には目を見張るものがあった。一見すると歴史的な木彫りや古美術品のようにありながら、その肌の質感は現代のフィギュアカルチャーを想起させるほどに生々しく、滑らかである。この「古くて新しい」奇妙なりアリティが野口作品の魅力の一つだ

と感じた。また描かれる武士たちは、鎧という強固な殻を纏っていないながらも、どこか頼りなく、あるいは休暇中かのようにリラックスした姿をしている。英雄的な武士像ではなく、現代にも通じる「等身大の人間」としての哀愁やユーモアが漂っていた。鎧という記号的な強さと、その内側にある人間の弱さや優しさ。そのギャップを精巧な技術で可視化することで、見る者の想像力を強く掻き立てる展示となっていた。



「鎧を着て見る夢 — ARMOURED DREAMER —」
展示風景

彫刻の森美術館では、野外彫刻の解放感と、企画展における緻密な人間描写という対照的な芸術に触れることができた。この経験は、自然の中で五感を通じた鑑賞という、机上の学習だけでは得られない視点を私に与えてくれたと感じている。今後も、こうしたフィールドワークを通じて得た感性を、自身の研究活動にも活かしていきたい。